

「白紙の設計図」

伊東市立門野中学校三年 石井 道真

私がこの話を考えたのは国語の作文の授業。作文と言えば、おそらく、国語の中の手強いもののランキング上位に入るであろうものの一つでしょう。自分の思いを言葉にして、書く。たったこれだけなのに、なぜ、こんなにも苦戦するのか、と私は毎度ながら思います。

さて何を書こうか、テーマ一覧には環境問題や災害についてなどがありました。それらは私にとって重すぎる。自分から行動することができるのか。私がどうしようかと悩んでいると、クラスメートの誰かが「将来について書く」と言っている声が聞こえてきました。なるほど、将来についてか。確かに私たちはもう中学三年生。進路について考えなければならぬ時期だな。そう思った私は、将来について書くことを決めました。

ところが、改めて考えてみると、私は自分の将来について、まだぼんやりとしか考えられていないということに気がつきました。今までは、ほぼ確定している進路があり、それに沿って進んできました。しかし、今は無数の選択肢があり、そこから選ばなくてはなりません。これまで、決まった道を歩く中で、自分の中で膨らんで消えていった自分の妄想。ぼんやりと描かれていたそれらは、何となく生きていくうちに色を失っていきました。それらを鮮明に描くこと、自分が何をしたいのか、どうしたいのか、今の私にはまだよく分かりませんでした。

皆さんは将来の夢はありますか。ある調査によると、子供の頃の憧れの職業、またはそれに関連する職業についた人は二十二パーセント、つまり約五人に一人ほどだそうです。これは、夢という目的地があったからこそ、そこに向かって進み続けられたのだと思います。しかし、私には今のところそんな夢はありません。「人生設計図」というものがありますが、私の設計図はまさに白紙です。

そんな白紙の設計図を私はこれから描いていかなければいけません。私の人生史上初となる自分で決める進路選択を私は決められるのか？最初に言ったように、私は、今この世界で起こっている問題に口を出せるほど偉くはないし、自分から行動を起こせるほど、聖人でもない。嘘だつてつくし、怒られてしまうこともあります。しかし、そんな人間でも、この世界で何か役立つことをしてみたいと思うし、したい。その気持ちは、私のこのぼんやりとした人生設計図の中でも、変わることなく存在しています。私たちが過ごす何気ない日常の中で、皆と学び、友情を育む学校生活の中で、チームの仲間と切磋琢磨し合う部活動の中で、自分の未来へのヒントを、きっかけを見つけられるかもと思って生きています。そのきっかけも、他の人にとってはなんてことない出来事かもしれません。それでも、この人生の中で、何か自分の心に響くような私にとってのきっかけと出会えることを望んでいます。

人生は自分のものだ、とは言われていますが、だからこそ、一度きりの人生で選択を間違えたくないし、よりよいものにしたい。と言っても、たとえ少しくらい人生で後悔をしたか

らといって、人生をリセットしようとする、なんてことはもったいないのではありません。この人生では、テレビゲームのように残機なんて物はありませんからね。結局は、人生の中でどんなことがあっても諦めないメンタルというものも大事なんだなと思いました。私自身もそういう「諦めない、物事は大抵なんとかなる。」という気持ちを大事にしていますし、気に入っています。

私は、小学三年生の頃からずっと野球をやってきました。休日は練習や試合があり、中学生になると、遠征で早朝に出かけて夕方に帰ってくるということもたくさんありました。そういう日々が続いたのはとても大変でした。しかし、今、部活が終わり、何もない休日を過ごす、自分の選択が違えば、こういう日々を過ごしていたのかもしれないなと思いました。でも、私は選択を間違えたとは思っていません。野球を通して、身体能力の向上だけでなく、野球をやっていなければ会えなかった友達もできたり、辛い練習があっても諦めずに続けられたりしたことは、この先の人生できっと役に立つと思うからです。

この先の未来でどんなことが起きるかは分かりません。そして、私がどんな風になっているのかも分からないし、どうしたいと思っているのかも分からない。ただ、そんな先の未来よりも、今は、少し先のことだけ考えて、「今」という時間を生きること意識してみてもいいなと思いました。「明日は明日の風が吹く」という言葉があります。今はまだ事細かには描かれていない人生設計図も、明日になれば素晴らしい図面が出てくるかもしれません。たとえ出てこなくても、まずはちょっと、少し先だけ、という風にマイペースにいきたい。今日は今日の風に吹かれながら、設計図の下書きを一ミリでも、一パーセントでも進めていきたい。今よりもいい設計図が描けるように、今日の自分は昨日の自分より少しでも前へ、明日の自分へバトンをつないでいきたいです。